氏　　名	松﨑博子
学 位 の 種 類	博　士（図書館情報学）
学 位 記 番 号	博 乙 第　2803　号
学位授与年月日	平成　28 年　11 月　30 日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
審 査 研 究 科	図書館情報メディア研究科
学位論文題目	シェラの図書館学教育思想と実践に関する研究

主　　査	筑波大学　教授　博士（文学）	綿抜豊昭
副　　査	筑波大学　教授　博士（文学）	松本浩一
副　　査	筑波大学　教授　博士（教育学）	吉田右子
副　　査	筑波大学　教授　文学修士	逸村裕
副　　査	専修大学　教授　博士（図書館情報学）	野口武悟

論　文　の　要　旨（2,000 字程度）

審査論文は、1950～1960 年代のアメリカを代表する図書館学教育者であり、同時期に学部長としてウェスタン･リザーブ大学ライブラリー･スクールの中心人物であったジェシー･H･シェラ（Jesse H. Shera）（1903～1982 年、享年 78 歳）の図書館学教育思想とその実践について、文献資料を調査対象として分析をおこないその実態を明らかにすることを目的としている。

本論文の「第 1 章」（序論）では、「研究目的」「先行研究」「本論文の構成」「本論文で使用する用語」について述べている。

「第 2 章」「第 3 章」「第 4 章」では、シェラが学部長を務めたウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクールの歴史について述べている。「第 2 章」「第 3 章」ではシェラが学部長に着任する以前の図書館学教育をとりあげている。まず「第 2 章」では、19 世紀後半のアメリカ図書館界で活躍した図書館員の一人として知られる、クリーブランド公共図書館の館長ウィリアム・ブレット（William Brett）により開始された図書館員講習について述べ、次にブレットに大きな影響を与えた、メルヴィル・デューイ（Melvil Dewey）の経験的かつ実践的な図書館員養成教育について述べ、最後にアンドリュー・カーネギー（Andrew Carnegie）の寄附金によって設けられ、ブレットが学部長として迎えられるウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクールの開校がどのような状況でなされたかを明らかにする。「第 3 章」では、ブレットの死後に成されたライブラリー・スクールの実態調査と勧告等から成る『図書館サービスのための養成』（*Training for Library Service*）（通称「ウィリアムソン・レポート」）と同レポートがウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクールにおける教育に与えた影響について論じ、またその後のウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクールの歴史を、タイラー時代、ハーシュバーグ時

代、グラント時代に分けて述べている。「第4章」では、シェラがウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクール学部長に着任してから後を、科目「修士課程研究課題」に着目し、第1期1952年9月-1958年8月、第2期1958年9月-1962年8月、第3期1962年9月-1970年8月の3期に分けて述べている。第1期は科目「修士課程研究課題」を必修にした時期、第2期は修士課程研究課題の提出義務を廃止した時期、第3期は科目「修士課程研究課題」そのものが廃止された時期である。

「第2章」から「第4章」までで、経験的かつ実践的アプローチであった図書館学教育が、シェラの時代になって、理論および研究を重視する図書館学教育へと転換が図られたことを明らかにしている。

「第5章」では、シェラの活動時期を、「第1期　幼少期から専門図書館員であった時期」(1903～1938)、「第2期　シェラがシカゴ大学大学院図書館学研究科に入学してからシェラがシカゴ大学の教員であった時期」(1938 ～1952)、「第3期　ウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクールの学部長になってから晩年まで」(1952～1982) の3期に分けて、シェラの活動等を調査し、図書館研究者および教育者として評価すべき事蹟を明らかにしている。

「第6章」では、シェラの思想家としての側面の一端を明らかにするために、マーガレット・イーガン (Margaret Eagan) とともにシェラが考案したとされる社会認識論について述べるとともに、関連してシェラの社会認識論と図書館理論について、およびシェラの社会認識論とドキュメンテーション論について考察し、シェラらの社会認識論がヨーロッパのドキュメンテーションの影響を受けた、書誌を中核にするコミュニケーション・プロセス研究であり、そのコミュニケーションに注目して、書誌理論を構築しようとした点に独自性があると述べている。さらにシェラが書誌を図書館の本質ととらえ、書誌組織化を重視し、特に高度で、専門的なものをアメリカ版ドキュメンテーションとし、主題専門性を有するスカラー・ライブラリアンが研究者に対して学術情報を提供するための書誌のしくみであったことを述べている。

「第7章」では，シェラの図書館学教育思想について述べている。まずチャールズ・C・ウィリアムソン (Charles C. Williamson)、ルイス・R・ウィルソン (Louis R. Wilson)、アーネスト・リース (Ernest Reece) からどのような影響を受けたかを調査・検討したうえで、シェラの独自性を考察し、理論および研究の重視という特徴を明らかにしている。

「第8章」(結論) では、まずはじめに「第2章」から「第7章」までを要約したうえで、1950-1960年代のアメリカで、ウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクールにおいて展開したシェラの図書館学教育とその実践は、理論および研究に基づくものであったと結論づけている。

審　査　の　要　旨（2,000 字以上）

【批評】

本論文の「第 1 章」では、研究目的、先行研究、本論文の構成、本論文で使用する用語について述べられている。

ジェシー・シェラ（1903～1982 年）は、シカゴ大学大学院図書館学研究科ではぐくまれた図書館学の系統に位置づけられる教育者であり、その図書館研究の功績は、アメリカ図書館協会が図書館研究賞に「シェラ」の名を冠したことで象徴されるように、高く評価されている。中でもアメリカ図書館学の歴史において特記すべき存在と考えられる。また、日本の図書館情報学が、アメリカの図書館情報学の影響を強く受けていることは周知のことといって過言ではあるまい。とするならば、日本の図書館学ともかかわりの深いアメリカの図書館学において評価される図書館学研究者・教育者を研究対象とすることは、図書館情報学の博士論文としてふさわしいと考えられる。また図書館学教育に貢献し、先導的役割をはたしたシェラの図書館学教育思想やその実践等についての研究は意義あるものと考えられる。

シェラに関する先行研究については、すでに図書館の歴史に関する研究およびシェラらが考案した社会認識論に関する研究は複数なされている。しかしながら、本論文で論じる図書館学教育思想等については、本論文の著者である松﨑博子による研究の他はない。したがって博士論文として新規性のあるものと考えられる。

研究方法は、文献資料を用いて分析、考察を加え、その特質等を明らかにするものである。アメリカ図書館協会「図書館学教育部」のアニュアル・レポート、同じくアメリカ図書館協会「図書館学教育部」の統計委員会の資料を用いるなど、アメリカの重要な資料の調査もおこなっており、取り扱った資料についてよき選択がなされており、以下、各章について批評を加えるおりに述べるように、その分析、考察は堅実なものと考えられる。

「第 2 章」「第 3 章」「第 4 章」では、シェラが学部長をつとめたウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクールの図書館学教育の歴史について述べている。

「第 2 章」「第 3 章」ではシェラが学部長に着任する以前の図書館学教育をとりあげている。「第 2 章」では、まず 19 世紀後半のアメリカ図書館界で活躍した図書館員の一人として知られる、クリーブランド公共図書館の館長ブレットにより開始された図書館員講習について述べ、次にブレットに大きな影響を与えた、デューイの経験的かつ実践的な図書館員養成教育について述べ、最後にカーネギーの寄附金によって設けられ、ブレットが学部長として迎えられるウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクールの開校について述べている。「第 3 章」では、ブレット死後のウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクールを、タイラー時代、ハーシュバーグ時代、グラント時代に分けて述べている。図書館の歴史研究において、看過できぬ点をもらすことなく、全体に目配りした、堅実な研究成果として評価できる。

「第 4 章」では、シェラの独自性を明らかにするために、図書館学教育において重要な位置をしめる科目「修士課程研究課題」に着目し、丁寧に文献にあたりながら 3 期に分けて検討している。その着眼点は注目すべきであり、その成果は、シェラの独自性を明らかにする研究成果として評価にあたいする。

「第 5 章」では、シェラの活動時期を、3 期に区分して述べている。図書館学研究者および教育者としてのシェラの活動について述べるにあたって、図書館との関わりのあり方に着目した活動時期の区分は妥当なものであり、信頼の置ける文献資料に基づいた評伝は、信憑性があり、本論文の成果として評

価できる。

「第 6 章」では、シェラの社会認識論について述べられている。これについてはすでに哲学分野からの研究の蓄積があるが、図書館情報学の視点から考察した点に新規性がある。特に「専門性」に着目し、主題専門性を有するスカラー・ライブラリアンが研究者に対して学術情報を提供するための書誌のしくみを視野に入れていたとする点は評価にあたいする。

「第 7 章」では，シェラの図書館学教育思想について述べている。まずウィリアムソン、ウィルソン、リースからどのような影響を受けたかを調査・検討したうえで、シェラの独自性を考察し、理論および研究の重視という特徴を明らかにしている。思想については、より広範囲に、具体的にはウィリアムソン、ウィルソン、リースの三人以外からの影響の有無を調査することが、今後の課題としてあるものの、丁寧に文献を読み込んでおり、その分析は妥当なもので、評価できる。

「第 8 章」（結論）では、本論文の研究目的である、シェラの図書館学教育思想とその実践の実態についてまとめられており、その目的はおおむね達成されたといえる。

以上を総括すると、アメリカの図書館史で重要な位置づけがなされるシェラに関して、俯瞰的な研究をしたもので、これまでそうした研究の蓄積のなかったなかで、シェラの図書館学教育思想とその実践について明らかにし、その功績を明確に述べた点は、本論文の新規性として評価することができる。最終的に導き出された結論には独自性がありかつ妥当なものと判断できる。したがって、全体として本論文が明らかにした知見は、今後のアメリカ図書館史の研究の発展に資するものであり、博士の学位論文としての水準に十分達していると判断できる。

【学力の確認結果】

平成 28 年 10 月 27 日、図書館情報メディア研究科学位論文審査委員会において審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答をおこなった。引き続き、「図書館情報メディア研究科博士後期課程（論文博士）の学位論文審査に関する内規」第 23 項第 3 号に基づく学力の確認をおこない、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

【結論】

よって、本学位論文の著者は博士（図書館情報学）の学位を受けるに十分な資格を有すると認められる。